

「明治の元老政治」 伊藤博文、山県有朋

平成14年8月3日・高根台公民館

これまでの私の話で、国家の重要問題と云うと必ず元老が出てきて、大きな役割を果たしてきました。皆さんの中にも、それでは元老とはどんな存在だったのか、疑問に思われた方も多いと思います。そこできょうは「明治の元老政治」というテーマで、明治国家がどのようにして作られ、またどう発展していったのか。元老中の元老である伊藤博文と山県有朋を中心に、話してみたいと思います。

昭和十五年の十一月、最後の元老と云われた西園寺公望が亡くなりました。九十一歳の高齢でした。国葬が行なわれましたし、ちょうど私の祖父が七十五歳で死んだばかりだったので、当時小学生だった私もよく覚えているのですが、正直云って祖父に比べ「大変なお年寄が死んだ」と云うくらいの思いでした。ところが実は、この元老こそが明治、大正の日本を動かしていたのです。大正四年九月、元老の井上馨が静岡県興津の別荘で危篤になった時です。病気に障ってはいけなさと云うので、東海道線を走る全列車が興津へさしかかると、徐行運転をして息を潜めるようにして通ったと云います。こんな話が残っているほど、現在では想像もつかないくらい大変な存在が元老だったのです。

元老は、憲法や法律に基づいて置かれたものではありません。それでいて、そんなに大きな権勢を誇ったのは、いずれも明治維新に手柄を立てた明治国家の建設者であり、国の初めに勲があつたということ、天皇の詔勅で「元勳」とされたからです。戦前の天皇絶対の時代に、これほどのお墨付きはありません。元勳とされた元老は全部で九人います。ただ一人、西園寺公望がお公家さんの出身でしたが、後は伊藤博文、山県有朋、井上馨、桂太郎と長州が四人、黒田清隆、西郷従道、松方正義、大山巖と薩摩が四人です。「明治維新は薩長によって成った」と云われますが、この言葉通り元老政治は裏を返せば薩長の藩閥政治でもありません。ところが日清、日露戦争という明治国家最大の危機をどうにか切り抜けることが出来たのは、この元老の存在に負うところが大きかったです。

実は明治憲法そのものは政治機構、ことに戦争になつた時の戦争指導に大きな弱点を抱えていました。第一に、総理大臣の権限が極めて弱かつたことです。憲法第一条に「万世一系の天皇之を統治す」とありますから、国家の主権は天皇が握っているようですが、その天皇は第三条で「神聖にして侵すべからず」と云うことは、天皇は政治責任を負っていないのです。では、その責任は誰がとるのかと云うと、第五十五条に「國務各大臣は天皇を輔弼しその責めに任ず」とあります。

輔弼というのは天皇に助言し補佐するという意味ですが、ある意味では明治憲法の性格を一番よく表した言葉だと思えます。つまり天皇の統治権は、國務大臣が天皇を助け、助言することによって行なわれ、大臣が責任をとったのです。

戦前は総理大臣のことを内閣首班と云いました。これは内閣での席次第一位と云うことであつて、内閣の首長、長ということではありません。例えば外交問題は外務大臣といった具合に、大臣の一人一人が天皇に直接責任を負つていて、総理大臣はそのまとめ役に過ぎないのです。現在の憲法のように、大臣に対する指揮監督権もなければ、言うことをきかない大臣を首にすることも出来ません。内閣の中で一人でも意見が違えば、「閣内不一致」で総辞職するしかないのであります。

戦争中、独裁者のように振る舞つていた東条英機が総辞職に追い込まれたのもそうなんです。昭和十九年七月にサイパン島が陥落した時、「もう東条内閣ではダメだ」と、重臣たちの間に倒閣の動きが出てきました。東条は重臣二人を入閣させ、重臣を取り込んだ内閣改造で何とか乗り切ろうとしたのですが、それには國務大臣のポストを空けなければなりません。そこで國務大臣で軍需次官の岸信介、戦後首相になる岸に國務大臣の辞任を求めたのですが、岸に拒否されて結局は内閣総辞職しなくなつてしまいました。当時の東条は、首相、陸相、軍需相のほか参謀総長も兼務し、いわば権力を一手に握つていましたが、その東条でさえ一國務大臣のポストを自由に出来なかつたのです。

その上「統帥権」という、大変厄介なものがありました。統帥というのは軍隊を動かすこと、軍隊の最高指揮命令権のことですが、第十一条に「天皇は陸海軍を統帥す」とあり、天皇の統帥権は陸軍の参謀総長、海軍の軍令部総長の輔翼で行なわれました。輔翼も補弼と意味は同じで、やはり補佐することです。ところが「統帥権の独立」といって、これは政府、議会から独立した天皇の大権だとして、これには総理大臣といえども口出し出来ないのです。昭和になつて軍部が大きな発言権を持つようになると、政治が軍事を支配せず、軍事優先の国家体制になつた原因でした。

そして何とも奇妙なことに、こうした天皇の行政権と統帥権とを調整し、まとめて補佐する機構が、日本にはなかつたことです。誰がその調整機能を果たすのかといえば、天皇ということになるのですが、何でも思ひのままになる専制君主ならともかく、臣下の助言を建前としている立憲君主には不可能なことです。東条が戦局が悪化した十九年二月、強引に参謀総長を兼務したのも、その真意は統帥と政務の一体化で自分の立場を強化しようとしたものだったのです。

こうした憲法の欠陥がもろに出たのが、昭和に入つてからの日本でした。出先の軍隊が勝手に火をつけて騒ぎを起こし、統帥権を盾にしてどんどん軍隊を進めて行きます。昭和六年の満州事変がそうでした。関東軍が柳条湖で満鉄線路を爆

破し、これを口実に満州全土を支配下に置こうとしたのです。昭和十二年の支那事変にしても、元はといえば蘆溝橋の些細な発砲事件でした。ところが中央は中央で、将来の展望もなまこれに黙認し、ずるずる引きずられる結果になつてしまいました。国策がいつも後手後手になつたのです。それでは同じ憲法の下でなぜ日清、日露戦争はうまくいったのでしょうか。それは天皇に代わって元老たちが実質的に調整機能を果たし、憲法の欠陥を補ったからなのです。

日露戦争が始まったのは明治三十七年二月、第一次桂太郎内閣の時でしたが、伊藤、山県、井上、松方、大山と五人の元老がいました。黒田と西郷は亡くなつており、桂と西園寺はまだ元老になつていません。ロシアの日本公使ローゼンは開戦直前、こんな報告を本国政府に送っています。「日本の内政、外交は元老の同意がなければ何も行なわれない。総理大臣といえども、元老の意思に反しては何も出来ない。そして元老たちは、功成り名を遂げて、年をとつていたので、この期に及んで、一国の安全を賭してロシアに戦いを挑んだりすることは、万に一つもないだろう」。ズバリ、元老政治の本質を鋭く衝いた指摘です。事実、井上と松方の六十八歳を最高に、一番若い大山でも六十一歳でした。当時としてはかなりの年ですし、彼らがまた一樣に、何とか超大国ロシアとの戦争を避けたいと思つていたのも確かです。ただロシアの脅威をはねのけるには戦争しかないとなつた時、元老たちは結束して事に当たつたのです。ロシアを相手にいつまでも戦つていたら、日本に勝ち目は無い。戦争の将来の見通しにも優れ、その考えで一一致し、また実行力も持つていました。

御前会議で日露開戦が決まつた夜、伊藤は貴族院議員の金子堅太郎を呼び寄せてアメリカ行きを命じています。アメリカ世論を味方につけ、金子とハーバード大学同窓であるセオドア・ルーズベルト大統領に、講和の斡旋をもらおう狙いです。開戦と同時に戦争の終結を考える。伊藤の優れたリーダーシップでした。戦争にはお金がかかります。財政通の井上と松方は、外国で日本公債を募集して戦費を調達するため、いち早く日銀副總裁の高橋是清を欧米に派遣しています。参謀総長の大山は満州軍総司令官として出征する際、薩摩の後輩・海軍大臣の山本権兵衛に、この戦争をいつ終わらせるか、その軍配の揚げ時を誤らないよう頼んでいます。そして奉天の戦いが勝利に終わると、政略と戦略の一致を訴え、日本が有利なうちに戦争を終わらせるよう、外交交渉をせかしたのです。陸軍の大御所・参謀総長の山県も満州の最前線を視察して、満州軍の戦闘力が限界に達していることを率直に報告しています。見事なばかりの政治と軍事の調和であり、それを支えたのは、元老たちのしっかりと現実認識だったと思うのです。

近代国家としての日本の骨格、内閣制度や明治憲法を作つたのは伊藤博文であり、統帥権につながる参謀本部を作つたのは山県有朋です。それでは慶応四年一月、鳥羽伏見の戦いで戊辰戦争が始まつた時、二人がどの程度の存在だったのか

と云うと、伊藤二十六歳、三歳年長の山県にしても二十九歳。まだまだ若造と云つてもいい年齢です。明治三十四年十一月、伊藤が何とか日露和解の道を探ろうと、ロシアの首都ペテルブルクを訪問した時の話です。昭和の初めに首相になると、ロシアの歩兵連隊で兵隊たちと一緒に寝起きしながら、当時世界最強と云われたロシア陸軍の実態を探っていたのですが、田中に云わせると、貴族出身の将校は兵隊を奴隷同様に扱い、兵隊たちは将校を恐れてはいるが、反抗的感情を鬱積させている。軍隊の生命である精神的結合が全くないと云うのです。田中はテュールを叩かんばかりにして、「開戦の時機は、シベリア鉄道が単線で大部隊を輸送出来ない今しかない」と迫ります。伊藤が「青二才の書生論を聞きにロシアに来たんじゃない。もう帰れ」とはねつけるど、田中は「青二才とは何ですか。閣下が維新の大業に奔走された時は何歳でしたか、青二才だったじゃありませんか。私はすでに三十七歳になっていきます」と譲りません。「貴様のような奴がここにいるのは、国交上の妨げだ。東京へ電報を打って帰朝させるから覚悟しろ」と正面衝突です。この直後、田中に帰国命令が出たので、田中は伊藤の差し金で一時は辞職まで決意したと云います。実際は参謀本が日露戦争に備えて、ロシア事情に詳しい田中を参謀として呼び戻したので、元老を恐れずにスゲケ自分の信念を云うあたり、これが長州の気分だったのでしょう。

しかし伊藤は、単なるロシア恐怖症ではありませんでした。国を挙げての主戦論の中で非戦論を唱えると言うのは、昭和の時代を考えたってわかりませんが、まさに命懸けのことなのです。伊藤は無理な戦争を始めてはならないし、また始めた戦争は、いつかは終わらせねばならないと考えていました。伊藤は政治家としてのその自明の理をよくわきまえていたからこそ、開戦決定の日に早くも金子堅太郎をアメリカに派遣して、戦争終結への布石を打ったのです。

ところで、維新の時はまさに青二才、脇役に過ぎなかつた伊藤と山県ですが、この二人を日本の表舞台に押し上げることになったのは、実は「維新の三傑」と云われた薩摩の西郷隆盛、大久保利通、長州の桂小五郎、後の木戸孝允ですが、いわば「元勳」であるこの三人が、明治十年の西南戦争の前後に相次いで亡くなったためでした。それにしても、長州とは云つても極めて身分の低かつた二人が、どうやってその地位を掴み、またどんな考えで日本の骨格造りしたのか。まず、幕末から維新にかけての長州藩を見てみたいと思います。

お手元の年表をご覧になって下さい。嘉永六年、一八五三年にペリーの黒船が浦賀にやって来てから、明治元年まではわずか十五年です。この間に二百六十年の徳川幕府があつたという間に崩壊したのですから、まさに激動の十五年でした。外交問題はそれまで幕府の専決事項で、幕府が勝手に決めていたのですが、黒船来航に慌てた幕府が、それを朝廷に報告し、許可を求めたことが、幕府の弱体化

りをさらけ出す結果になりました。しかも孝明天皇は病的なほどの外人嫌い、攘夷論者です。攘夷の志士たちは、幕府より高い権威を天皇に求め、尊皇攘夷論となって燃え盛ったのです。

では長州藩が明治維新の立役者になることが出来たのは、なぜだったのでしょうか。まずこの藩には、関ヶ原の戦いで西軍の総大将として戦って敗れ、それまで中国地方百数十万石を支配していたのが、長門、周防の二国三十六万九千石に押し込められたという、幕府に対する積年の恨みがあります。しかも幕府をはじめどの藩も苦しんだ財政の建て直しに、長州藩はいち早く成功していました。それは下関という、西回り航路の要になる港を持つていたからです。北前船といって、北海道や東北と西国の物資を交流する日本海通運が栄えましたが、長州藩は下関に立ち寄り北前船に金を貸し付け、商売をしていたのです。長州の海の向こうは外国です。豊かになった藩の財政は、異国船に対する危機感と共に関門海峡に砲台を築かせ、攘夷論を盛んにしました。そこへ安政の大獄で吉田松蔭が処刑され、松蔭門下生を一気に尊皇攘夷へと走らせることになったのです。伊藤と山県は末席とはいえ、その松蔭門下生に名前を列ねていました。

伊藤博文と云う人には、終始運の良さがついて回ったように思います。まず第一に、貧しい農家の倅だった伊藤が、曲がりなりにも長州藩士の資格を持てたことです。伊藤の父十蔵は百姓では食べていけないので、伊藤武兵衛という足軽の家に奉公するうち、親子共々その養子になりました。伊藤十四歳の時です。「何もあんな男を養子にしなくても」と反対が出た時、武兵衛は云ったそうです。「十蔵は大した奴じゃないが、倅は将来きつと大物になる」。どこか見所のある少年だったのでしょう。幸運の第二は、桂小五郎の義兄弟、来原良蔵の若党になり、松蔭門下生の来原に勧められて松下村塾に入ったことです。来原の死後、桂に引き取られ、桂に従って江戸、京都と往来するうちに、いつぱしの勤王の志士になつていきました。文久二年、松蔭門下の双壁と謳われた高杉晋作と久坂玄瑞が、攘夷のため国のみ楯になろうと御楯組を結成し、品川のイギリス公使館に焼き打ちをかけた時、伊藤もこれに参加したのです。同志十三人の中に井上馨がいて、その井上のお陰でイギリスへ留学出来たことが、第三の幸運でした。

井上は二百二十石の志道という上級武士の家に養子に入り、その頃は聞太と云つていました。伊藤とは気が合ったのか、普通なら口もきけない身分の伊藤が、六歳も年上の井上を「聞太」と呼び捨てにしても、全く気になかなかつたと云います。この鷹揚さが生死を共にするうちに、二人を生涯の友にしたようです。その井上が蒸気船の勉強に、藩から他の三人と共にイギリス留学を命じられました。藩命とはいえ、鎖国の時代ですから密航です。井上は養子先に迷惑をかけてはと井上姓に戻りましたが、その時伊藤が「オレも一緒に連れて行ってくれ」と頼んだのです。留学には一年間に一人千両、五人で五千両の金が必要だったと云いま

すが、藩から出たのは六百両。がっかりしている井上に、伊藤がチ工を授けました。「麻布の藩邸には、鉄砲買い入れの金として一万両がある。しかし幕府の目が厳しいから、買うことは出来ない。その一万両を流用したらどうか。我々を外国へ送るのは、将来生きた武器とすることになる」。うまいことを云うものですが、井上も懸命に藩の政務役・周布政之助を口説いたのです。周布は藩政改革を推進、吉田松陰らの急進派にも理解を示し、後に守旧派と対立して自決した人ですが、「オレは見ないふりをするから、持って行け」と云ったそうです。

これが伊藤の人生を決定づけました。最初に立ち寄った上海で、井上が悲鳴を挙げたと云います。港にひしめく欧米の蒸気船を見て、「こんなに船がいる。日本に向かってこられたら、一たまりもない。攘夷なんてとんでもない」と。伊藤もロンドンで造船所や工場、軍隊、議会と見て回るうちに、かつてのバリバリの攘夷論者がコロリと変わっていました。そして「世界をよく見て」という伊藤の生涯を貫く考え方は、この二十二歳のロンドン密航で、形づくられたとも云えるのです。

下関のことを馬関といいます。俗に「馬関戦争」と云われる長州藩とイギリス、アメリカ、フランス、オランダの四国連合艦隊との戦いが、実は長州藩を攘夷から倒幕、幕府打倒へと、大きく路線転換させるキツカケになったのです。朝廷から厳しく攘夷を迫られていた幕府は、文久三年五月十日を「攘夷決行の日」としました。幕府とすればその場しのぎ、まさか実行する藩があるとは思ってもしなかつたのですが、「待っていた」とばかりに飛び付いたのが長州藩です。アメリカ商船を皮切りにフランス、オランダの軍艦と、関門海峡を通る外国船を片っ端から砲撃したのです。関門海峡は外国船にとつても、横浜から長崎、上海を結ぶ重要な航路です。下関が報復攻撃され、関門海峡では翌年の元治元年八月まで一年三か月の間に、六回も戦闘が行なわれました。ところが長州藩士と云えば、戦国時代そのままの甲冑姿、武器も火縄銃に刀と槍に弓です。大砲の数が足りないのです。松の丸太を削り抜いて砲台の大砲に見せかけたと云うのですから、とても戦争になりません。パリの軍事博物館にはその時分捕られた毛利の紋の入った青銅の大砲が、今も陳列されているそうです。

相次ぐ敗戦に、態勢の建て直しに起用されたのが高杉晋作です。高杉と云う人は天性の革命家なのでしょう。大体が攘夷を旗印に御楯組を結成した時、すでに上海をその目で見ていて、攘夷なんてとても出来っこないと思っていたと云うのです。高杉の狙いは倒幕にあったのですが、いきなり倒幕といっても藩論が割れてしまう。そこで藩論を引つ張るため、まとめ易い攘夷を旗印にしたのだと。これは高杉の胸のうちを知る伊藤博文の言葉です。高杉は、泰平の世に慣れ切った藩の侍たちに見切りをつけ、新しい民兵組織を作りました。力量と志さえあれば身分なんかどうでもいいと、百姓、町人から、武士といつても身分の低い足輕

が隊員です。藩の正規兵に対して、外国軍を迎え撃つ変則の部隊ということで、「奇兵隊」と名付けました。もろもろの隊、諸隊と云われるこうした民兵組織は全部で十一作られました。やがて高杉の狙い通り、倒幕戦争の中心勢力に育っていったのです。

ロンドンの新聞で「馬関戦争」を知って、びっくりしたのが伊藤と井上です。「このままでは長州藩が潰れる」と、留学を半年で打ち切り、三か月がかりで横浜へ帰ってきました。その足でイギリス公使館に飛び込み、攻撃中止を訴えたのですが、イギリスは四国連合艦隊十七隻による攻撃を準備中でした。山口へ戻り、「とても戦争をする相手ではない」と説得しましたが、聞き入れられません。その頃の長州藩は、攘夷の爆発そのままに忙しい藩でした。京都の政変で御所の警備を解かれたことから、蛤御門で会津、薩摩と戦って敗れ、幕府は長州征伐を号令したのです。同時に二つの戦争は戦えません。そこで外国と停戦しようとなつたんですが、もう時間切れで連合艦隊の下関攻撃が始まっていました。砲台が次々と破壊され、陸戦隊も上陸してきます。これは和議しかないとなつた時、伊藤と井上は談判に高杉を起用しよう提案したのです。「バカな家老ではダメだから、高杉を家老ということにして交渉させなさい」。殿様に向かつてこんなことをズケズケ云うあたり、幕末の長州藩の気分がよく出ています。伊藤は談判の段取りをつけに、漁船で単身イギリスの軍艦に乗り付けたと云いますから、これも命懸けでした。

宍戸刑馬と云う「俄家老」になりました高杉は、こうしたことには打つてつけの人だったようです。萌黄色の地に大きな紋を染め抜いた礼装用の直垂、黒の烏帽子といった大仰な身なりです。イギリス公使館の書記官アーネスト・サトウは「外交官の見た明治維新」という本の中で、「白絹の下着は、目がさめるように純白だった」と書いています。重々しく出て、相手を煙に巻く。三回にわたった交渉でも、イギリスが強く出れば、高杉は敢えて「一戦も辞さず」と開き直り、三百万ドルの賠償金も、「我々は朝廷と幕府の命令で戦つたまでだ。取るなら幕府から取ってほしい」と、幕府に押しつける形で決着させました。その頃の三百万ドルは蒸気船が百隻も買える大金です。イギリスがこんな法外な要求を出したのは、これをダシに兵庫開港を迫る狙いでしたが、幕府は兵庫が京都に近いとあつて朝廷をはばかり、開港より賠償金を払う方を選んだのです。もつとも百万ドル払つたところで幕府が倒れ、残りは明治七年に新政府がやっと払い終わりました。新政府の役人になつていた伊藤や井上も、まさか厄介払いしたツケが巡り巡つて戻ってくるとは、思つてもいなかつたでしょう。

それはともかくとして、馬関戦争の敗戦は兵器の大切さを教えました。薩英戦争で敗れた薩摩藩がそうだったように、長州藩も武器を求めてイギリスに近づいたのです。イギリスも積極的に後押ししました。アーネスト・サトウは「長州人

を破つてからは、我々は長州人を好きになつていた。また長州人を尊敬する念も起こつてきていた」と書いています。ヘラヘラ笑いながら行動に裏表のある幕府の役人と違って、長州は忠実に協定を実行し、信用に値すべき人間だと思つうようになつたと云うのです。こうして長崎のグラバー邸で有名な武器商人グラバーを通して、新式の洋式銃二万四千丁を買い入れ、長州藩はあつという間に、日本一近代的な軍事集団に変身しました。そして攘夷の無謀さを知つたリーダーは、そのエネルギーを幕府打倒へ向けたのです。

山県有朋も仲間という、武士とはいえないような身分の出でした。友人に大変な秀才がいて、学問ではとてもかなわないと、武芸で身を立てる決心をします。毎朝暗いうちに起きて、イチジクの木に槍を振るい続け、槍術の先生になるのが夢だつたと云います。ところが安政五年、開国が攘夷かで騒然としている京都へ藩から選ばれて視察に行つたことが、山県の運命を変えることになつたのです。一緒に行つた六人のうち四人までが松蔭門下生で、熱心に勧められて松下村塾に入つたのです。山県が直接松蔭の教えを受けたのは、ほんの短い期間でしたが、終生松蔭を尊敬し、松蔭のことを口にする時は常に「松蔭先生」と衿を正し、松蔭のことを書く際には必ず「松蔭門下生山県有朋」と記したそうです。家柄も門閥もない山県にとって、松蔭こそが精神的な支えだつたのでしょうか。

では、その門下生の中で山県ほどの程度の存在だつたのでしょうか。一番弟子の吉田稔麿が一枚の紙切れに悪戯書きをしました。威勢のいい放れ牛に、烏帽子をかぶつた袴姿の人物、木剣に棒つ切れ。山県が「一体何です」と聞くと、吉田は笑いながら「放れ牛は高杉だ。尋常一様では乗りこなせない人物だ。袴姿は久坂で、廟堂に座らせれば堂々たる貫禄の政治家だ。入江九一は鈍いとはいえ、木剣くらいにはあたるう」。最後の棒つ切れは」と山県が聞くと、「それはお前だ。員数だけには入るが、これと云つて云うべきところがない」。高杉は結核で、久坂と入江は蛤御門で、吉田も京都の池田屋で新撰組に斬られて、維新の夜明けを見ないで死にました。高杉二十七歳、久坂二十三歳、入江二十六歳、吉田二十三歳の若さでした。そして棒つ切れが生き残つて、明治の日本を作ることになつたのです。

若い頃の伊藤博文の評価も似たようなものでした。松蔭が友人に宛てた伊藤の紹介状が残っています。「才劣り学おさなし。質は直なるも華なし。僕すこぶるこれを愛す」。才能は他の者より劣り、学問も幼稚です。性質はいいが、華やかさがありません。まあ「僕はそこを好んでいます」と書いてくれたのが救いで、伊藤が山県と違って「松蔭の世話には余りなつていないし、教えも受けていない」と云うあたり、この紹介状に苦い思いがあつたのかも知れません。

ところで長州藩が変わつているのは、早くから一種の内閣制をとつていたことです。殿様は対外的には藩を代表する元首ですが、内政の実権は家老以下の家臣

団が握っていました。藩主の毛利敬親は、何でも「そうせい」と許可を与えるので「そうせい侯」と云われた人ですが、失敗があつても藩主は責任をとりません。それは政策の立案実行者の責任だったので。いわばイギリス流の「君臨すれど統治せず」でしたが、伊藤が「大臣補弼」の明治憲法を作った時、どうもこの毛利の殿様が頭にあつたように思います。

馬関戦争の敗戦は急進的な攘夷派の失敗でしたから、幕府恭順派が復活してきました。高杉たち急進派が「俗論党」と呼ぶ新政権の弾圧は凄まじく、急進派の二十人を処刑、家老三人に切腹させて幕府に降伏したのです。高杉はいち早く福岡に逃げていましたが、奇兵隊など諸隊に解散命令が出たと聞いて、クーデターを起こそうと下関に戻ってきました。高杉が頼みとするのは初代総督を務めた奇兵隊です。ところが軍監といつて、奇兵隊ナンバー2の山県が動かないのです。というのも総督の赤根武人がクーデターには反対で、奇兵隊を解散しないですむよう藩政府と交渉中でした。留守を預かる山県とすれば、その結果を見てからでも遅くはないと思つたのでしょうか。怒つたのは伊藤です。伊藤には高杉と一緒に戦つてきた、同志としての連帯感があります。「私の力士隊でよかつたら使つて下さい」と、高杉に決起を促したのです。伊藤が隊長の力士隊は、力自慢の村相撲出身者で結成した三十人足らずの隊でしたが、伊藤の呼び掛けに応じて八十人ほど集まつたところで、高杉は出陣しました。藩政府はいつまでも解散しない奇兵隊に武力鎮圧の姿勢を見せたため、さすがの山県も奇兵隊二百人を率いて高杉側に加わり、藩論を倒幕にひっくり返すことに成功したのです。

この話には、伊藤と山県の性格の違いがよく出ています。細心さと放胆さ、この両極端を備えたのが、伊藤だったと云われます。伊藤自身「父は放胆な男で、構うことないから思い切つたことをやれと、いつも云つていた。母は逆に極端なほど気の小さい心配性で、この二つが自分の中に共存しているようだ」と云っています。いつも穏健路線を取り続けた伊藤ですが、時として思い切つた決断を見せることがあります。この力士隊決起はその典型でしょう。ところが山県は、あだ名が「味噌徳利」。何をやるにも簡単には腰を上げません。徳利は口から中身が一遍に出ません。とく、とくと少しずつ出て、まして中身が味噌です。慎重かつ神経質でした。仲間がフグを肴に氣勢を上げて、山県はフグの毒に当たるのを用心したのか、ただ一人別の肴で酒を飲んだと云います。赤根武人の末路は悲惨でした。裏切り者として晒し首にされましたが、山県の方は奇兵隊を握つたことで、戊辰戦争では官軍参謀の地位を掴みます。そして明治六年に徴兵制を実施、陸軍で不動の地位を築くキツカケを作ったのです。徴兵制の土台になったのは奇兵隊です。町人百姓の奇兵隊は、武士と違つて刀にこだわりません。いち早く銃になじんだ奇兵隊で幕府軍に勝つた。この自信が山県を徴兵制に踏み切らせたのです。

維新の時十五歳だった明治天皇は、明治の人にとっては近代日本発展の象徴でした。そして元老たちが腕を揮った背景には、この明治天皇の存在が欠かせません。それでも、天皇が元老に唯々諾々と従ったわけではなく、時には辛辣な批評もし、納得しなければなかなか「うん」と云わなかったことは、土佐出身で長く側近として仕えた佐々木高行の日記でも分かります。

元老政治は薩長の藩閥政治の側面を持ちながら、実質的には長州主導でした。薩摩の影が極めて薄いのです。それは明治天皇の「長州人は才知に長じ、薩摩人は概して正撲なり」。正撲とは真つすぐで、激しいということでしょうか、この言葉が射ているように思います。確かに伊藤も山県も頭がよく、権力を操るのが上手で、行政能力、人事能力にも優れていました。これに対して薩摩の大山は軍人一筋、政治には関心を示しませんでした。松方も財政通で知られ、総理大臣を二度務めました。天皇の「伊藤は一人にて決断せしが、松方はとかく不決断」とか「くくく鈍く、わかりが遅し」。天皇もひどいことを云うものですが、この言葉通り行政能力はありません。明治三十一年から大正二年の山本権兵衛内閣まで、薩摩からは十五年間も総理大臣が出なかつたのです。

明治の元老は多かれ少なかれ、財界と結びついていました。お金で綺麗だったのは伊藤くらいなもので、一見謹厳そうな山県にしても、一万八千坪の目白の椿山荘は大阪の藤田伝三郎から贈られたものですし、別荘を九つも持っていました。山庄は大阪の藤田伝三郎から贈られたものですし、別荘を九つも持っていました。陸軍卿時代には、かつて奇兵隊にいた陸軍のご用商人山城屋和助に、陸軍の公金六十五万円を貸し出しています。一部は山県の懐に入つたと云われますが、山城屋が自決してうやむやになりました。長州の四人の元老の中で、ただ一人総理大臣になっていない井上馨も、お金の面では余り評判が良くありません。ただ山県の陰湿な感じと違って、井上はあけっぴろげでした。秋田県の尾去沢銅山を難癖をつけて取り上げ、臆面もなく「井上馨所有」の立て札を立てたあたり、その最たるものでしょう。しかし大隈重信が「理屈のへたな男だったが、それでいて仕事は成功させた」と云い、評論家の山路愛山が「新政府の山ほどの難問を、短時日のうちに目口の開くようにした」と評価するように、仕事は出来ました。

井上は馬関戦争のあと開国派とに生まれ、俗論党の刺客十一人に滅多切りにされます。苦しむ姿を見兼ねて兄の五郎三郎が介錯しようとする、母親が身を投げ出し、「私を斬ってからにしないさい」。畳針で傷を縫って井上が一命をとりとめた話は、戦前の修身の教科書「母の愛」で有名です。井上が財政に手腕を発揮し、財界大御所の地位を築いた背景には、この白刃の下をかくぐつて身につけた、胆力と果断さがあつたのではないのでしょうか。山路愛山は「天性才を愛し、惚れ込んでよく人を用いた」と云っています。井上の右腕になつた渋沢栄一はその一人ですが、何よりも六歳下の伊藤の政治的才能に惚れ込み、自らその右腕になろうとしたのだと思います。伊藤の後継ぎも井上の後継ぎも、井上の兄五郎三郎

の子供であり、二人は盟友以上の結びつきで結ばれたことになります。

吉田松蔭という人は、実に人を見る目が鋭かったと思います。これは松蔭が常に門下生と一緒に食事をとり、一人一人の個性をしつかり掴んでいたからだと思われる。松蔭は「俊輔、周旋の才あり」と書いています。俊輔とは若い頃の伊藤の名前ですが、よく「八方美人」と云われたように、この周旋の才、仲立ちの才能こそ、伊藤を明治の政界に飛躍させる原動力になったのです。伊藤は明治四年、外国を知っているということで、岩倉使節団の案内役として欧米へ行きました。ここで新政府の実力者岩倉具視、大久保利通の信任を得たことが大きかったです。伊藤を引立ててくれた木戸孝允も一緒でしたが、なかなか気難しく、しかも大久保との仲が良くありません。伊藤の周旋の才は遺憾なく発揮され、帰国後は参議、そして大久保暗殺後はその後を襲って内務卿と、明治の政界をリードする地位についたのです。

×

×

山県有朋のことを「長州閥の総本山」とか「陸軍の大御所」、あるいは「軍国主義の権化」とか云います。いずれも、山県の強烈な権力志向を表わした言葉です。山県は日清戦争で第一軍司令官として出征した時、枢密院議長を辞めませんでした。枢密院というのは、国政について天皇の相談役を勤める、いわば最高顧問です。つまり、天皇の側について初めて勤まる役なのですが、山県は権力の座にこだわったのです。山県は伊藤より三歳年上なのに、政界では常に一步遅れをとりました。総理大臣になったのも、枢密院議長になったのも、伊藤より遅いのです。これが伊藤に対する強烈なライバル意識、そして同じ長州閥の二人の間に、微妙な確執と対立を生むことになりました。二人の対立の中でも際立ったのが、天皇と政党に対する考え方の違いです。

「玉を握る」。維新の志士たちが天皇を指して、好んで使った言葉です。薩長は天皇を握ったことで「錦のみ旗」を押し立て、賊軍となった幕府打倒を成し遂げました。もし天皇を幕府に押さえられていたら、それこそ薩長は朝敵となり、維新も崩壊してしまっただでしょう。こうして出来た明治国家ですから、天皇をシンボルにして統一国家を作ることが目標となりました。伊藤はその天皇を国家の機構の中で考え、山県は機構を超えた権威として考えたのです。伊藤は天皇に対して、も持ち前の明るさで、はばかりことなく物を云ったと云います。佐々木高行は、明治天皇がこう洩らした言葉を日記に書いています。「伊藤は才力に任せて随分我儘なり。他に伊藤ぐらいの人物あらば、互いに相制して都合宜しきも、その人なし。欧州にてはビスマルク、支那にては李鴻章、日本にては自分と、いよいよ大天狗となりたり」。明治二十四年頃のことですが、それでも天皇は、この大天狗を誰よりも信任し、難しい問題には必ず「伊藤に確かめたか」と、念を押されたのです。

これに対して山県は、天皇に恐懼する、いつも恐れ畏まるといった態度を取り続けました。ところが山県が崇めたのは、神聖化した権威としての天皇だったのです。明治天皇が亡くなる二週間前のことですが、一時間たらずの枢密院会議で再三ウトウトと眠り込まれました。枢密院議長の子爵は、その都度、軍刀の先でコソコソ床を叩いて、天皇に注意したと云います。天皇にはその時すでに尿毒症の症状が出ていたのですが、山県にとつては、いつもと違う天皇の異常より、乱れた天皇の姿勢が問題だったのです。徹底的に天皇の権威を高め、その権威で軍を統制し、自分の勢力拡大を図ったのが山県だったと云えます。

伊藤が内閣制度を作り、初代総理大臣になったのは明治十八年、伊藤四十四歳の時です。日本が近代国家として世界に出ていく以上、欧米並みの憲法を持ち、国会を開くことが必要でした。自由民権運動が高まる中、明治十四年に二十三年の国会開設を約束した時、議会に対応出来る政府の組織作りが課題となったのです。維新以来続いてきた太政官制度は、太政大臣と左大臣、右大臣の三人が天皇に政治責任を負っていて、参議はその大臣を補佐するだけです。行政の実権は参議が握っているのに、これでは権限も責任もはっきりしません。西南戦争の時、太政官のトップは太政大臣の三条実美でしたが、実際に政府を動かしていたのは参議の大久保利通でした。こういえば、大臣と参議の関係がお分かり頂けると思いますが、左大臣有栖川宮熾仁親王、右大臣岩倉具視でも分かるように、宮様や公家、旧大名など、門地、血統が良くないと大臣にはなれないのです。

明治十五年に伊藤が外国の憲法を調べにドイツへ行った時、右大臣の岩倉は病身を押して、横浜まで見送りに出ました。岩倉はすでにガンにかかっていた、翌年亡くなりますが、伊藤を見送ったことで「自分が後を託したのは伊藤だ」と、行動で示したのです。その岩倉が伊藤にくれぐれも頼んだことは、議会に左右されない強い君主権の確立、皇室と天皇制の安泰でした。伊藤自身もその頃は、イギリスのような議員内閣制は日本にはなじまない。大臣の連帯責任制で内閣の意志が強くなり過ぎ、天皇の主権を脅かすのではないか。そんな心配を持っていました。ですから日本の憲法はイギリスに学ばず、君主権の強いドイツ憲法をお手本にしたのです。

帰国した伊藤の構想は、三大臣をやめて参議を新たに大臣とし、大臣は原則として各省長官を務め天皇を補佐する。これで責任と権限をはっきりさせました。ただ単独輔弼責任といって、大臣一人一人が天皇に責任を負う形をとつたので、どの大臣も平等で力が強くなった代わりに、総理大臣は大臣たちの首班、内閣の統一を保つだけの弱い存在になったのです。伊藤は政治改革をする以上、総理大臣には自分なる積もりでした。問題は太政大臣三条実美の処遇です。明治天皇の意向は三条の総理大臣横滑りでしたが、それでは公家政治が続く、古い体質がそのまま残ってしまいます。そこで伊藤は、宮中で天皇を助ける内大臣というポ

ストを新しく設け、総理大臣より上席にして、三条を祭り上げたのです。しかも政府から宮中を切り離したことで、政治への宮中の口出し、政争に宮中が巻き込まれる心配をなくしました。

天皇の御前で開かれた首相選考会議では、長州閥の話し合いで、山県が伊藤を推薦する手筈になっていました。ところが例によって、山県がなかなか発言しませんでした。短気者の井上馨がしびれを切らし、「これからの総理大臣は、外国電報が読めなくてはダメだ」。こう口火を切ると、山県もやっと「それなら誰かれと詮議するまでもなく、伊藤より他にいないではないか」と応じたので、反対する者もなく、天皇も承認されたと云います。まさにイギリス留学、英語の効用でした。もっとも伊藤の英語力がどの程度のものだったのかと云うと、自由民権思想家の中江兆民に云わせると「レッテルが読める程度」。まあそんな程度のものであったんでしょうが、何と云っても大きかったのが外国を知っていたこと、世界の中の日本の弱い立場を知っていたことだと思えます。

伊藤の次の仕事は憲法です。明治十九年の秋、井上毅、金子堅太郎と憲法草案の起草に取り掛かった時、伊藤は云ったそうです。「我輩を総理大臣と思うな。全員が憲法学者を以て任じ、同等の見識を以て議論を戦わせよう。少しも我輩の説に遠慮する必要はない」。金子は後々まで「伊藤は実にさわやかだった」と云っています。その伊藤の主張が井上、金子に反対され、「我輩は君らの愚論を採用しない」と、我を張ったことがありました。すると井上毅は「大臣ご不興。議論すべからず」と、書類をまとめてさっさと帰ろうとし、伊藤が慌てて詫びを入れ引き止める。こんな侃々諤々の論議でまとまった憲法草案でした。

枢密院の審議では、第二章「臣民の権利義務」の権利という言葉に反対が出ました。伊藤の反論が凄いのです。憲法で天皇をどう位置づけしようとしていたのか、伊藤の考えがはつきりわかります。伊藤は「憲法を作る精神は、第一に君主の権利を制限し、第二に臣民の権利を守ることにある。権利を明記しないで責任だけを書くのなら、憲法を作る意味がない」と言い切っているのです。伊藤はこうも云っています。「議会の承認を経ないで国政を執行すれば、立憲政体でなくなる」。独裁政治だと云うのです。伊藤も勿論、天皇を国家の基軸としてしましたが、これは立派な「天皇機関説」です。天皇機関説と云うのは、東京都知事をした美濃部亮吉さんのお父さん、憲法学者美濃部達吉の「国家は一つの法人であつて、天皇はその最高機関である」とした学説です。機関と云うと物質的で、何か天皇を汚すとも思つたのか。昭和になつて軍部や右翼の激しい攻撃で、美濃部は貴族院議員の地位を追われましたが、伊藤が生きていたら、勿論美濃部に味方していたでしょう。

これは余談ですが、よくドラマや映画などで、侍たちが「万歳」をしている場面があります。あれはどうも間違いのようです。万歳はそんな昔からあつたのでは

なく、明治二十二年の紀元節の日に発布された、この憲法を祝って初めて唱えられたそうです。総理大臣をした若槻礼次郎が回顧録に書いているのですが、日本中がお祝い気分で大変な騒ぎだったと云います。東京帝国大学でも、学生たちが二重橋前に整列して、陛下の馬車をお迎えすることになったのですが、外国のような「ブラボー」とか「ヴィヴ・フランス」といった、歓呼の言葉が日本にはありません。敬愛の気持ちを表わすのに、ただお辞儀するだけでは物足りません。教授たちの間で、この際日本の歓呼の声を作ろうではないかとの話が出て、経済学教授の和田垣謙三が考えた「万歳、万歳、万々歳」を唱えることになったと云うのです。ところが学生たちの大声にびっくりしたのか、馬が万歳の第一声で棒立ちになってしまい、学生も遠慮して第二声が小さくなり、とうとう第三声の万々歳は云わずじまい。こうして「万々歳」なしの、万歳だけの三唱が日本に定着したのだそうです。

さて、年表をご覧になって下さい。総理大臣は初代から七代まで、長州と薩摩が順番になっていきます。内閣制度になっても、政治の安定には薩長のバランスが欠かせませんでしたし、大臣の数も大体同数ずつ割り振ったのです。そして二十二年十一月には、「元勳」という重石が加わりました。伊藤と第二代首相を辞任した黒田清隆に、「特に大臣の礼を以てし、茲に元勳優遇の意を昭す」。こう云う詔書が出たのです。黒田内閣の総辞職は、大隈重信外相の不平等条約改正案をめぐって閣内が割れたためでした。大隈が爆弾を投げられ、右足を失ったこともあって、第三代の山県にバトンタッチするまで、二か月ほど内大臣の三条実美が暫定首相を務めました。政情不安を心配された明治天皇が、伊藤と黒田の首相経験者を元勳にして、特に閣議にも出席できるようにしたのです。これが元勳の始まりです。さらに二十四年五月に山県内閣が総辞職した時、後継首相を誰にするか、天皇が元勳に相談されたことから、これが慣例となって元老はキャビネット・メーカー、「内閣を作る人」として、その発言力を強めていったのです。

この間、二十三年十一月に第一回帝国議会が開かれました。それに先立って七月に第一回総選挙が行なわれたのですが、その結果は政府を愕然とさせるものでした。薩長の藩閥政治に批判的な自由党、改進黨を民党と云いましたが、三百議席のうち百七十一議席と、反政府派の民党が過半数を占めてしまったのです。総選挙といっても有権者は四十五万人、国民の％余り。島根六区なんか有権者がたった五十二人だったそうです。直接国税十五円以上を納めた者ですから、ほとんどが地主といってよいでしょう。ところが富国強兵に一生懸命の頃です。その財源は地租増徴といって土地に対する増税ですから、反対が出るわけです。そこへ藩閥政治に対する反感が重なり、政府にとつては予想外の結果になったのです。

伊藤の政党認識も、その頃は甘いものでした。井上毅や金子堅太郎が「議会が開かれれば、政党的激しい攻撃が予想される。政府は味方になる与党を持つ必要

がある」。こう云つても伊藤は、「ドイツのビスマルクを見よ。政党を持たなくても、堂々とやっているではないか。誠心誠意を以て当たれば、どうして反対出来るか」。この辺が伊藤の自信家たる所以です。「超然主義」、政府は政党の動きに左右されず、超然として独自の政策を進める。これが伊藤や政府の考え方でしたが、議会で政府案の否決が続けば、超然としてはいられなくなつたのです。

国会解散による二十五年二月の総選挙は、政府の大干渉で有名です。何しろ内務大臣が先頭に立つて、「議会の解散は陛下のお叱りである」。こんな理屈にならない理屈をつけて、「民党議員の再選は陛下の思召しに背く」と、民党候補の選挙を妨害したのです。警察官が投票所まで付き添つて、誰に投票するか、いちいち覗きこんで監視したと云いますから、全国で二十五人の死者を出す流血騒ぎになりました。しかし、それでも民党には勝てなかつたのです。伊藤が、政党との協力を真剣に考えるようになったのは、この頃です。明治天皇は伊藤について「時々変節あり」とか、「きのうのことをきょう俄に変える」と佐々木高行に洩らしています。伊藤が、実は伊藤が優れていたのは、好き嫌いの感情ではなく、問題の如何によつて動き、また態度を変えた柔軟さだつたと思います。

伊藤は第三次内閣を組織する際、民党の協力を取り付けようと進歩党の大隈、自由党の板垣退助を入閣させようとしたが、山県の反対で実現しませんでした。山県の政党嫌いは有名です。「政党は逆族なり」、政党は反逆者だと書いた手紙が残っていますし、伊藤が参内してくると、「尊氏が参りました」と天皇に云つたと云うのです。後醍醐天皇に弓を引いた足利尊氏のことですが、政党と提携したり、政党を作つたりするのは、山県にとつてはまさに逆族に思えたのでしよう。しかし地租増徴案が二十七対二百四十七という歴史的な大差で否決されると、伊藤の腹は固まりました。伊藤は議会を解散して、元老会議で自ら新党を結成する考えを明らかにしたのです。伊藤と山県の間で激論になりました。山県が「元老は不偏不党であるべきだ」と云えば、伊藤は「それなら爵位、勲章、官職の一切を返上する。元老もやめる」と譲りません。山県が「政党内閣は天皇統治のわが国体に反する」と云えば、伊藤は「憲政に関する根本観念が違ふ」と一蹴しました。「超然内閣」から「政党内閣」へ、伊藤の百八十度転換でした。

伊藤が「それなら君がこの政局を引き受けるか」と山県に詰め寄ると、山県も沈黙するしかありません。進歩党と自由党が合同して、憲政党という大勢力になつていたので。こうして三十一年六月、伊藤の推薦で大隈と板垣が首班に指名され、二人の名前をとつて「隈板内閣」と呼ばれる大隈内閣が発足したのです。日本で初めての政党内閣でした。時事新報は「民党が薩長三十年の政府を乗つ取つたのは、徳川三百年の天下を乗つ取つたに等しい」。こう書いて画期的な意義を強調しましたが、その大隈内閣も内輪揉めで、わずか四か月であつてなく崩壊してしまいました。そして伊藤は分裂した憲政党と手を握り、三十三年九月、念願の

立憲政友会を結成し、初代総裁になったのです。

世に「元老政治」と云われるのは、実は三十四年六月の桂太郎内閣が始まりなのです。隈板内閣を除けば、それまでは元老自身が内閣を率いていました。桂内閣は、薩長閥では元老でない者の初めての内閣であり、しかも元老が一人も入閣していません。ですから「一流内閣」とか、後ろに元老が控えているので「どんちゅう内閣」とか云われましたが、自ら桂首相の後見役を以て任ずるお舅さんが、何人もいるのですから大変です。ロシアのローゼン公使が指摘したように、常に元老たちと連絡を取り、重要な政治決定には予め了解、同意を取り付けることが必要でした。しかし弱体と見られた桂内閣は、日露戦争で「挙国一致内閣」になったこともあつて、四年七か月と戦前では最も長い長期政権となったのです。そしてこの桂内閣以後、元老が組閣することはなく、後ろで睨みをきかす元老政治が続くこととなります。

今までお話ししてきた政治制度の主役が伊藤博文だとすれば、軍政、軍事制度の主役は山県有朋です。伊藤がいれば何でもござれ、問題にぶつかって柔軟に対処したのと違って、山県は性格でしょう。びっくりするほど緻密で、周到な布石を打っています。日本の軍隊が「天皇の軍隊」になるのは、実は西南戦争の後なのです。それまで軍隊を動かしていたのは太政官政府でした。シベリアン・コントロール、文民統制だったのです。明治六年十月、征韓論に敗れた西郷隆盛ら五人の参議が辞任した時、政府は参議が各省長官である卿を兼任することで体制を強化し、政情不安を乗り切ろうとしました。例えば参議の大久保利通が内務卿を兼任し、工部卿の伊藤は参議兼任になったのですが、ただ陸軍卿の山県だけは陸軍中将という武官であるとの理由で、政策決定機関である閣議構成員の参議を兼任することが出来なかつたのです。明治政府が厳格にシベリアン・コントロールを守ろうとしていたことがわかります。

それが天皇直属の軍隊に変わったのは、明治十一年十二月に参謀本部が設置されてからなのです。西南戦争では、戦争が始まってから大将を選び、軍を編成したため、後手後手になった反省がありました。そこへ「竹橋事件」と云われる近衛砲兵の反乱事件が起こり、陸軍卿の山県は大きなショックを受けたのです。千代田区竹橋の近衛砲兵第一大隊で、兵隊たちが給料ダウンや西南戦争の恩賞を不満として騒ぎ出し、大隊長ら二人を惨殺した事件です。政府軍が政府に鉄砲を向け、軍の指揮権を太政官に任せてはおけない。山県は軍が直接握るしかないと思案本部を作ったのです。参謀本部はドイツにならったものですが、山県は自ら初代参謀本部長になりました。

天皇の補佐機関である参謀本部には、建前としては決定権もなければ、指揮命令権もありません。それは大元帥である天皇にあるのですが、決定のための情報

を集め、判断をして結論を出すのは参謀本部です。天皇親裁と云つて天皇自ら裁決を下しますから、政府を経由する必要もなければ、やがて開かれる国会で審議される必要もありません。これが「帷幄上奏権」、帷幄とは幕を張り巡らせた総大将のいる所、つまり天皇に直接上奏することですが、よほどのことがない限り天皇は拒否されませんから、参謀本部の思う通りに運ぶことになりません。山県としては憲法制定の前に、「統帥権独立」の既成事実を作ってしまったわけです。そして明治十五年、「朕は汝等軍人の大元帥なるぞ」で有名な軍人勅諭を出します。この軍人勅諭で天皇の権威を軍隊に確立したのですが、自由民権思想が高まり、軍の思想の純粹性が要求されている時でした。「世論に惑わされず、政治に拘らざ」と軍人の政治関与を戒めながら、山県は極めて政治的な軍人でしたし、昭和に入つてからは「統帥権の独立」を盾にした軍の政治関与は公然となつていったのです。

伊藤の憲法草案では、軍の編成権は「勅令を以て定む」となつていました。ところが枢密院の審議で異義が出て、陸海軍の編成だけでなく、常備軍の定員も天皇の権限になつてしまいました。勅令で決めることにしておけば、勅令を審議する枢密院が軍に発言権を持ちますが、これを削ってしまったため、軍をコントロールする所がなくなつてしまったのです。伊藤がこの変更を呑んだ背景には、富国強兵で軍備の充実が最優先の時です。それには枢密院や議会に縛られない方がよい。第一自分がいけば、勝手なことはさせないという自信があつたのでしよう。

事実、明治の間は軍に対する統制はしつかりしていたのです。明治二十七年の日清戦争で、首相の伊藤が一番苦心したのは、内閣と軍部との協調であり、特に外交と軍事をどう調和させるかでした。戦争の最高指導機関として大本營が設置されると、伊藤は明治天皇にお願いして、大本營の御前会議に首相と外務大臣の陸奥宗光が特に出席出来るようにしました。陸軍一の実力者である山県が第一軍司令官として出征してましたから、文官とはいえ元老中の元老であり、現職総理の伊藤の発言は圧倒的な重みを持つたのです。

二十七年暮れ、朝鮮半島から清国軍を撃退して旅順を占領すると、参謀次長の川上操六中将は北京に軍を進め、一挙に決戦を挑む作戦計画を立てました。ところが伊藤と陸奥は、列強諸国の干渉を心配したのです。中国大陸では各国がいろいろな商売をしています。首都北京に日本軍が迫り、清国崩壊の恐れが出てくれば、列強は居留民保護を名目に必ず干渉してくるに違いない。伊藤は十二月四日の御前会議で、「あえて軍議に口出ししようとするわけではないが」と断つた上で、「事いやしくも大局に関することである」と、北京作戦の中止を求めたのです。やがて下関講和条約で日本の遼東半島領有に、ロシアなどの三国干渉が出たことを考えれば、伊藤の優れた国際認識でした。そして憲法の重みを人一倍よく知っている伊藤が、あえて軍の作戦に口出ししたのは、国家の大事の前には、統

帥権という憲法の規定とか字句に構ってはられない。何よりも国の大事を優先させた発言だったので。

この直後、山県は第一軍司令官を辞任しています。表向きの理由は病気でしたが、参謀本部の停止命令に従わず、軍を進めようとしたための解任でした。川上参謀次長は統制違反の山県解任を決断しましたが、相手は何といつても陸軍切つての大作です。相談を受けた伊藤は、「それなら陛下にお願ひして、勅命を出して頂こう」と云つたそうです。天皇の勅語は「しばらく山県の顔を見ていない。しかも病氣と聞いて心配している。敵軍全般の状況を知りたいので、すみやかに帰朝して報告せよ」と、山県の体面を考え病氣と軍状報告を名目にしたのです。トルーマン大統領がマッカーサー元帥を一刀両断クビにしたのとは違って、いかにも日本的なやり方ですが、昭和の陸軍が出先の暴走のままに任せたことを考えれば、見事な中央統制でした。しかしこのことは、伊藤という優れた人間がいたからこそ、憲法のほころびを塞ぐことが出来たのであって、伊藤がいなくなれば憲法の穴は大きく広がる宿命を持つていたわけです。

ところで山県の大きな権力は、陸軍を握つたこともありましたが、内務大臣を何回もやって、内務官僚に強大な派閥網を作つたことが大きかったです。慎重かつ神経質で、簡単には人を近付けない山県です。しかし山県が慎重なのは、相手に利用されるのを恐れたからで、時間をかけて相手の利用価値を見極めようとしたのです。ですから一たび信用すると、心にかけてその面倒を見、必ず能力に応じたポストを与えたと云います。これが一見冷たそうな山県の周りに、人が集まつた理由でした。

山県はまた権威と名声を大切にしました。日露戦争のポーツマス講和交渉で、兵力、財政の面から、全面譲歩してでも妥結させるしかなかった時、参謀総長の山県は桂首相に「議決から軍事面の理由を削れ」と言い出したのです。「これ以上戦えない」と公式文書に残るのは、戦争の最高責任者として不面目だと思つたからです。桂に「いまさら議決の変更は出来ない」と断られ、会議録を記録した珍田捨巳外務次官を「気のきかないやつだ」と怒鳴りつけたそうです。腹に据えかねた珍田が伊藤に訴えると、伊藤は「何をいまさら山県はそんな横暴無理を云うんだ。君は決して間違つてはおらんぞ」と慰めたと云います。

山県が死ぬまで陸軍に君臨できた秘密は、実は明治三十一年に日本で最初の元帥になつたからなのです。いくら陸軍大将でも定年になれば予備役になり、一遍に軍に対する影響力を失つてしまいます。山県は元帥だからこそ、終身の現役陸軍大将でいられたのです。この山県の元帥は、実は伊藤が第三次内閣を組閣した時、山県系議員の多い貴族院の協力を山県に求めた、その見返りでした。貴族院は皇族や華族を中心に、多額納税者、大学教授や官僚出身者などの勅選議員二百五十二名で構成されましたが、今の参議院と違って衆議院とほぼ同等の力を持つ

ていました。伊藤の協力要請に、山県が持ち出したのが元帥府の設置だったので。伊藤とすれば「名譽欲の強い山県のことだ。大将だけでは物足らず、その上を求めたのだろう。最高顧問と云っても軍隊の指揮権を持つわけでもなく、まあ隠居さんみたいなものだ」と軽く考えたのですが、まさに山県の深謀遠慮でした。

山県という人は、自分が手掛けてきた組織の防衛にも実に抜かりないのです。政党内閣である隈板内閣が出来た時、そのポスト争いは凄まじいものでした。次官から局長、知事と、要職のほとんどを憲政黨員で取ってしまったのです。「これは大変だ」と危機感を募らせたのが、政党は逆族だと思っている山県です。山県は三十一年十一月に政権を引き継ぐと、まず文官任用令を改正しました。勅任官と云って高等官一等、二等の役人の自由任用制度を廃止し、高等官三等からでない任用出来ないようにしたのです。むやみやたらな政黨員が入ってこないよう、官僚組織から締め出したわけです。中でも山県の一番心配は陸海軍でした。三十二年五月に陸海軍省の制度を改正して、職員の規定に備考を一行ちよこつと付けたのです。「大臣及び次官に任せられる者は現役将官を以てす」。職員表には「大臣は大将、中将」と規定してありますから、それまでは現役を退いた予備役、後備役でもよかつたのが、現役でない陸海軍大臣になれなくなりました。これが「陸海軍大臣現役武官制」と云われるものですが、山県が念が入っているのは、制度の改正には「枢密院の審議」という歯止めをかけたことです。枢密院には自分の息のかかった顧問官が多く、いわば山県の牙城です。つまり簡単には改正出来ないようにしたのですが、こうして備考の「現役」という、たった二文字が日本の政治を大きく動かすことになるのです。昭和に入つて、気に入らない内閣には大臣を出さない。陸軍が内閣を倒す恐るべき凶器となりますが、この現役武官制については、いずれ機会を改めて詳しくお話しします。

さて明治四十二年、伊藤がハルピンで暗殺されると、山県の発言力は元老の中でも圧倒的なものになりました。ところが、秘かに元老政治の行き詰まりを心配していたのが、自らも元老になった桂太郎です。四十五年七月、外遊の旅に出た桂は同行の若槻礼次郎にこう云っています。「今までは維新の元勳たちが達者で陛下をお助けしてきたが、おいおい元勳も老齢になる。これから先は、国民全体が陛下を助け、日本の政治をやっていくようにしなければならぬ。それにはどうしても政党を持つ必要がある」。桂はその目でイギリスの議会政治を見てくる積もりだったので、ロシアまで行ったところで、明治天皇危篤の知らせで引き返し、桂自身も一年後には天皇の後を追いました。

こうして元老政治に代わる、適切な政治体制を見つけられないまま、山県も大正十一年二月、八十三歳で亡くなりました。山県の国葬は日比谷公園で行なわれましたが、欠席者が多く淋しかったそうです。権力に群がった者は、その権力者が死ねばもう用はないということでしょう。一か月前に同じ日比谷公園で行なわ

れた大隈重信の葬儀が、民衆政治家として雑踏を極めたのとは、余りにも対照的でした。東京日々新聞は「大隈侯は国民葬、きのうは民抜きに国葬でガランドウ」と書きましたが、山県の死で元老政治は実質的に終わりを告げ、残った西園寺公望がわずかに後継首班を推薦するだけになったのです。

こう話してきますと、山県という人は実にいやな権力亡者で、明治国家のマイナス部分は、みんな山県一人で作った感じがされると思えます。ところが山県は外交には大変気を遣った人なのです。新聞で真つ先に読むのが外電記事。そして少しでも分らないことがあると、秘書官に念入りに調べさせました。秘書官の間では、「この仕事をやると外遊三年に匹敵する」と云っていたようですが、軍勢力を頼んで中国を威圧するようなやり方にも反対でした。対中国政策でアメリカの疑惑を招かないよう、「アメリカとよく話し合え」というのが持論でした。平民宰相と云われた原敬は、「日米戦争は山県さえ生きておれば、起こらないよ。山県は外国に対しては腰の弱い人だ。外国には非常に懸念深い人である。いくら陸軍の若手が騒いでも、山県の存命中は大丈夫だよ」。こう云っていました。山県にはやはり馬関戦争での強烈な体験があつたのではないでしょう。山県の死と共に、余りにも強大だつた長州閥に対する反発が生まれました。長州と云うだけで陸軍大学の試験に受からない。反長州の感情が陸軍に新たな派閥を生み、陸軍の政治干渉を招いていきます。

それにしても、「伊藤がもう少し生きていたら」。この思いが強く残ります。伊藤は常々「自分の生涯で一番有り難く思うのは、云うまでもなく天皇陛下であるが、その次はおかか、細君だ」と云っていました。伊藤の妻梅子は下関の花柳界出身の女性でしたが、よく伊藤を助け、なかなかの賢婦人だつたようです。伊藤は韓国統監として赴任する時、何か予感がしたのでしよう。養子の勇吉に手紙を書いています。「梅子にはいろいろ苦勞をかけた。私に万一のことがあつたら、遺産のうち十万円を余生を送る費用として渡してくれ」。ところが伊藤の死後、遺産を調べてみると、十万円どころか、その半分もなかつたそうです。金銭には全く無頓着なのです。勇吉にはこうも云っていました。「人にはもって生まれた天分がある。だから何をやるのもいい。だが、もしオレの志を継ごうと云うのなら、天子様に忠義を尽くすことを寸時も忘れるな。次は至誠である。いやしくも天下に事を成し遂げようとすれば、命懸けのことは幾つもある。オレは今まで生きてきたのが、自分でも不思議と思うくらいだ。この覚悟をもつて当たれ」。これが伊藤の遺言になりました。

土佐出身で、西南戦争の熊本籠城戦を戦つた谷干城は、「戦争の如きは軍人でさえあれば出来る。しかし一国の国政を裁断して大過なきを得る才能、手腕のある政治家は滅多に得られるものではない」と云つて、伊藤の死を惜しみました。劇作家の中村吉蔵、この人は「井伊大老の死」など多くの歴史劇を残した人です。

が、太平洋戦争が始まった直後に亡くなりました。死後の昭和十七年に出版された伊藤の伝記に、こう書いています。「もし明治日本が、この平凡な偉人に引率されずに、覇気満々の自信家の手にあつたら、ずいぶん危険な瀬戸際にひきずられていたことだろう」。いわば遺稿とも云うべき中村のこの言葉には、闇雲に戦争に引つ張つていった軍部に対する批判が、こめられているように思います。

伊藤は何かする時、まず世界の情勢を考え、その中の日本の弱い立場を考え、どうすることが賢明かを判断しました。そして穏やかさと理性で、事を進めました。伊藤もまた、若かつた頃のイギリスでのショックを生涯持ち続けたのです。残念ながら昭和になつてからの政治家も軍人も、みんな「日本は強国である」という点から考えたのではないのでしょうか。私が日露戦争が大きなターニング・ポイントだつたと思うのは、この点です。日露戦争に勝つて、「一等国になつた」と思った時から、日本人の間に傲慢さが生まれていったのではないのでしょうか。